

# 2012年度鳴門市人権地域フォーラム

## テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2011年8月18日(木)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A (北島中学校教諭)

パネリスト B (会社員)

C (国府中学校教諭)

D (愛南町一本松支所)

### 《コーディネーター A》

皆さん、こんにちは。(会場から「こんにちは！」元気よく声が返る)会場いっぱいの中で、窮屈な思いをされている方もおいでだと思います。毎年、パネリストの語りを受けて、フロアから様々な思いを返していただきます。

(一言一言を丁寧に、ゆっくりと)21年が経過しているんですけど、板野中学校で、一人一人の思いや願いを語り合っていく学習を始めました。その時に、子どもたちの語りが、子どもたちの心に染み込んでいく。そして、その思いがまた、次の思いを引き出していく。同和問題学習が、よろこびになっていきました。仲間とつながるよろこびです。こんなに楽しい時間があるか。こんなに体が熱くなる時間があるか。そんな感動をかみしめてきました。

それは、全国同和教育研究大会(現在、全国人権・同和教育研究大会)で、様々な研修の場で、公開され紹介もしてきました。その流れの中で、このフォーラムを『ひとつと』から『わがこと』へ」をキーワードの中で、会場においでのお一人お一人の内にあるものを語っていただく。そんな学習の場として、この場をつくってきました。

21年前、子どもたちに同和問題を語った時に、私は、仲間の教師にこう突きつけました。「この問題はどこにあるのか。一人一人の教師の家族の中にある。自分自身の中にある。そのことを語らんとって、子どもたちが本心をさらけ出すことはない。」そのことを受けて、教師自らが、自分のうちにあるものを吐き出していきました。その思いに、仲間の教師がつながっていきました。語りが語りを生んでいきます。学習者が学習者を変えていく営みとなりました。

21年前、板野中学校へ赴任した時、2年生の学年を受け持って、その学年から始まった営みです。その子どもたちが3年生になった時に、その学習が学校全体のものになっていきました。その時の、その子どもたちの答辞が今も体を熱くします。こんな一説です。

**「多くの行事や取り組みの中で、学年全体で取り組んだ同和問題学習ほど、心に残るものではありません。2年生の時より始まったこの学習で、私たちは大きく変わりました。ある人が涙を浮かべながら自分の思いを打ち明け、またある人は、その人を支えるように、力強く自らの考えを語っていきました。」**

上辺だけ、建前だけに終わっていた同和問題学習から、私たちは、本音を語ることの大切さとうれしさを知り、その中から、自らの生き方として、同和問題学習を考えることができるようになってきました。差別に対する怒りや苦しみ、自分の差別意識と向き合った時の苦しさ、私たちは、本当の学習ができた、今、胸を張って言うことができます。

しかし、私たちの本当の生き方が問われていくのは、卒業してからです。母校を巣立ち、あるいは、この板野を離れ

**た時にこそ、私たちの真価が問われることとなります。「体が熱くなる」全体学習の中で、一人の仲間の腹の底から出た言葉でした。「熱くなる」私たちは、苦しさの中で、差別に負けそうになった時、この言葉を思い出し、仲間と共に歩み、差別解消の情熱をこれからの人生の中で燃やし続けていきたいと思います。」**

(答辞の言葉をかみしめるように、しみじみと)子どもたちの中にずっと残ります。20歳になっても、30歳になっても、40歳になっても、その場面が、その教室が、その体育館が、その時の仲間の表情が、ずっと生き続けていきます。教育の営みってというのはそこにあるんだと思います。1年間何かを教えた。それで終わるのではなくて、私たちの中にずっと生き続けていくものがあるんだと思います。

(力強く)そんな絆の中に、生きる誇りやよろこびが生まれていきます。今まで誰にも言ったことがない。このことを他人に言うことは絶対ないと思ったことが、安心して語っていける。その語れた自分を愛おしく思える。その語りに癒され、生きる力が湧く。そんな一人一人をつくっていく。それがこの学習のよろこびだし、本質だと思うんです。

今日、3人のパネリストの方に、思いを語っていただくわけですけども、それぞれの皆さんにそれぞれの生き方があるし、それぞれの生き様があります。3人の思いを受け止め、「私に何ができるか」「私に何が問われているか」自らに問いかけながら、本当に限られた時間になるんですけど、多くの人たちの本心や、精一杯の心の声が会場いっぱい広がっていく時間になればと思います。

まず、Dさんに思いを語っていただきます。ちょうど、10年前の夏でした。まだ、愛南町が合併をしていない時、一本松町の役場に勤めておられたDさんと、私は出逢うことになるんです。同和問題の研修のことで電話をしたら、その折、Dさんが、「先生、息子と出会ってください」と言われました。一本松の教育委員会に行った時、順平君を抱っこして、「これが私の息子です」と言われました。子どもの姿を生きがいとして、生きる意味を、ずっと私に問いかけてくれました。

「ありんこクラブ」という営みがあります。差別をなくしていく。人間が人間として大切にされていく。そんな関係性をつくっていく。そんな交流の場があります。資料も中に用意をいただいています。Dさんの思いや生きざまに出会っていただきたいと思います。それでは、Dさん、お願いします。(拍手)

## 《パネリスト D》

### はじめに

(立ち上がり、緊張した様子の中にもはっきりと)失礼します。愛南町から来ました。今、ご紹介いただきましたDです。座って失礼します。(着席しながらゆっくりと丁寧に語りが始まる)

お手元に、簡単なレジュメを作らせていただいておりますが、このレジュメにありますように、私は、昭和39年3月生まれです。鳴門には、初めて来たわけですが、今、高校野球が真っ盛りですが、高校まで野球をやっていました。私の一つ上の先輩が非常に強くって、31年前に夏の甲子園に出ました。鳴門といえば、鳴門高校の島田さん、秦さんという名前が浮かびます。甲子園でも活躍した強いチームだったなと思ひ出します。

### 息子の障がい

私はそんな形で、昔でしたから、スパルタの野球の中でやって来ましたので、「福祉」とか、「障がい」というものは、全然関係ないものだと思ってずっと生活をしてきました。息子は、平成7年生まれですが、今、高校1年生です。特別支援学校の訪問教育という教育を受けています。週3回、2時間、特別支援学校から先生が来て授業を受けています。

息子の病気は、「大脳皮質形成異常」です。これは、脳が未成熟で、脳のしわ少ない状態で生まれてきて、

そういうのが、一番悪くてんかん発作を起こすと言われています。そういうことで、息子は「重症心身障害児」という種類の障がいがあります。

そのあたりは、また後でもう少し詳しく触れさせていただいたと思います。まず、「障がい者」についてですが、生まれつきの障がい児というのは、いわゆる社会のお荷物というような、排除の意識を私自身も持っていましたし、まだまだ、そういう意識を持っておられる方は多いのかなと思います。そういう所から、そういう病気の子どもに対する憐みとか、施しという意識として表れるのだと思います。また、利用できるものは、リハビリなどを、更生の対象としてやってきた現状です。

「生涯にわたって障がいがある」というのが障がい児ということなのですが、一番古い書物と言われている「古事記」の中にも、「ヒルコ伝説」というのがあって、いわゆる、イザナギの命とイザナミの命の間で生まれた最初の神が、「ヒルコ」ということなのですが、今でいう脳性マヒというような形でしょうか。身体が十分に発育していなくて足腰が立たず、クニャクニャしていることから、血を吸う「蛭(ヒル)」に似ているということで「ヒルコ」と名付けられ、葦の舟に乗せて捨てられたという伝説があるようです。後に、漁民に拾われて、大切にされて七福神の恵比寿(蛭子)様になったという言い伝えがあるようにも聞いています。

ですから、蛭(ヒル)の子と書いて蛭子(えびす)という名前の方もありますが、ここからきているのではないかとおっしゃる方もあるようです。こういう古い書物にも、「不遇な子として生まれてきた子は必要ない」という考え方があったのかなという気がします。

#### **ありんこクラブや様々な会に加入し学ぶことを通して**

私の家族の支えとなっているものに、先ほどもご紹介いただいた、地元での障がい児とその家族、また支援者の会として、「ありんこクラブ」という活動があります。ここでは、障がいの種別には関係なく、発達障害、難聴、全盲、そして、重症心身障害はもちろんですが、今、17家族が加入しています。実際に一緒に活動に出てこられるのは10人くらいですが、そういう形で活動しています。

それと、「全国重症心身障害児(者)を守る会」、「全国訪問教育親の会」にも加入していろいろ教わっています。障がいという考え方での法律には、「障害者基本法(平成23年一部改正)」から始まって、「身体障害者福祉法」「知的障害者福祉法」「児童福祉法」「障害者自立支援法」「発達障害者支援法」など、たくさんの障害にまつわる法律があります。法律の位置づけとしてはいろいろあるんですが、「障がい」という考え方では、何らかの不自由な部分が生涯を通じて残るものであると私自身は思っています

「重症心身障害」と、先ほどうちの息子のことを言いましたが、どういうものかと言いますと、「大島の分類」というものがあり、資料を付けています。横が、寝返りや座ることはできても、立ち上がり等が自分できない等、移動の部分で、縦が、考えたり認識する力ということになるんですが、そういう両方を併せ持っている子ども。表の右下の黒く色を付けている部分ですが、数字で、1・2・3・4の部分に当たるところを重症心身障害と言います。うちの子は、起して座らせると、なんとか座れますので、大島の分類で行くと「2」くらいかなと思っています。

資料の裏を見ていただきますと、白黒ですが写真を載せています。次に、この左の写真は、先ほど「重症心身障害児を守る会」というものを紹介させていただきましたが、その会で、全国で使っているパンフレットです。非常にかわいい子どもたちですが、寝たきりの子どもたちで、当然、言葉もしゃべれない子どもたちというふうに考えていただければと思います。右側の写真の一番右がうちの息子で、一番年上です。隣に中学2年の娘と小学4年の娘がいます。

「重症心身障害児」と言葉で説明しても、なかなかイメージがしにくいかなと思っていて、このように写真載せていただきました。ここに出ている子どもたちは、重症心身障害の中でも、元気なというか、安

定している子どもたちです。中には、人工呼吸器をつけていたり、絶えず吸引が必要だったり、いろんな医療的行為の必要な子どもたちも多くいます。

### 訪問教育ということ…PTA役員の一番の仕事…

うちの子どもは、訪問教育と先ほど言いましたが、小学校1年生に入学した時から高校3年まで、うちの子が行っていた学校で、訪問教育の生徒が20名くらいいました。毎年誰かが亡くなっていました。訪問教育のPTAの役員をすると、広い範囲から来ていますので、なかなか集まることのないんですけど、一番の仕事は、誰かの訃報を打つことで、「〇〇ちゃんが亡くなりました。」そう連絡することでした。

私が生まれた昭和39年に、こういう重い障がいを持った子どもたちに対する、「重症心身障害児(者)を守る会」が発足するわけですが、その当時、国の方にいるいろいろ陳情に行かれたそうです。当時、こういう子どもたちを引き受けてくれる施設が、なかなかなかったそうですが、何とかこの命を守るために、引き受けてほしいということで、一生懸命に活動をされたんです。

その当時に国から言われたのは、「社会復帰のできない、社会の役に立たない、こんな重い障がいのある子には、国のお金、いわゆる税金は使えませんよ。」ということでした。それでも、当時の人たちは、「最も弱い子どもたちが切り捨てられれば、次の人たちも切り捨てられる。それでは、日本の幸せというものはないではないですか？」ということと、「親は、一生懸命社会のために尽くしますので、なんとか子どもたちの命を守ってほしい」と言いながら活動を始めて、今では、障害福祉の中でも、重症心身障害に対する施策は最も手厚いと言われています。

徳島県で言いますと、板野町になりますか、藍住町になりますか、記憶がはっきりしませんが、「東徳島医療センター」があります。また、「ひのみね療育園」という施設も徳島にあります。そこに入所している、子どもたち、人たち、また、そこに通園している人たちが、重症心身障害だと考えていただいたらいいかなと思います。

### 障がいの受容…5段階

次に、障がいの受容についてですが、親にもいろいろあるんですが、一般的には、資料に付けていますが、ドローターという人の考えられた図で、生まれた時にそういう子どもを持ってしまった時、また、幼くして病気とか事故で、そういう状況に陥った時の、母親の心理状態という所を出しているものです。

心理状態の変化を5段階に捉え、まず、①「ショック」と名付けて、こんなはずはないと②「否認」し、どこにもぶつけることのできない③「怒りと悲しみ」、そういう思いを繰り返しながら、そして、やはりこの子は自分たち家族が、特に、母親は、自分でしか守れないという思い④「適応」になっていって、この子と共に生きていく⑤「再起」。こういう気持ちを繰り返すと言われていました。この、「ドローターの図」は、私も、経験上こういった図が当てはまるなあというふうに思います。

### ありんこクラブの活動の柱と名前の意味

地元でやっている「ありんこクラブ」の活動ですが、平成9年から活動を始めました。その時には、やはり地域で、障がいのある子どもというのは「排除されるべき子どもたち」という意識でした。ですから、活動を一本松町で始めたのですが、何とか一本松町の子どもたちなんだと認めてほしい。その思いで、「この子どもたちをいろんな人に知っていただく」ということを活動の柱に据えてやってきました。

名前としては、ありのままを隠さず見てもらう。そして、人に見えなくてもコツコツとやっていく。そんな願いを込めて「ありんこクラブ」としました。そうすることによって、より住みやすい地域になってほしいということでやって来ました。やはり一番の願いとしては、「障がいに対する理解」ということなんです

が、要は、子どもの顔を知っていただく。「あれは、Dの所の順平君なんだ」というふうに、地域の、隣近所の、そんな立場の人にも知っていただく。「あの子は行動が激しいけれど、あれが自閉症とか言われる、どこそこのだれちゃんなんだ」とか、「知的障害の誰それ君なんだ」というふうに、直で知ってもらおうということをやってきました。

今日、時間がとれて来たらと話しているんですが、鳴門教育大学院で臨床心理学を勉強している23・24歳の女の子がいます。その子のお母さんが、現地で、この「ありんこクラブ」を作るきっかけを作ってくれた人です。

その、臨床心理学を勉強している娘さんは、「ありんこクラブ」が出来た頃小学生で、ずっと、そういう子どもたちと地域で一緒に暮らしていたので、それが当然だと思っていたらしくて、最初、東京の大学で卒論を書く時に、それが当然なんだと思って、その大学の教授に自分の育った環境を話したらしいんです。そうすると、教授から「そんな地域はまずない。あんたの地域が特別なんだ」と言われて、それだけ地域で障がいのある子どもたちと馴染んでいたんだと知った。おじちゃんたちがやっていたことはそういうことだったんだねと言ってくれたのが非常にうれしく思っています。

障がいのある子どもたちと、私自身が触れ合って、その中でも、私は重症心身障がい児と触れ合う機会が多いんですけども、その存在を知ってもらおうということが願いとしてあります。

それは、先ほどもお話しましたように、呼吸するのも一生懸命である。食べることも、全部介助です。元気な人であれば、当然、口から食べ、自然な形で排泄する。それが、生きているものすべてに言える自然の流れなんですけれども、胃瘻を創ったり、鼻から管を通して栄養を入れるということを含め、生活の全てを、人から、あるいは、何らかの器具を使って手助けをしてもらっている子がほとんどなんです。

ですが、その子たちからは、「一生懸命生きている」ということをすごく実感するし、先ほども言ったように、本当は少しでも長く生きてほしいんですが、重い障害があると、そんなに長くは生きられないという現状があったりして、それでも「一生懸命生きているなあ」ということを感じさせてくれます。そういうことも、「ありんこクラブ」の中では伝えていきたいなあと思っていますし、地域の方にも伝えていきたいと思っています。

お年寄りの方で、介護保険の適応になったり、寝たきりになった時など、「もう役に立たなくなった」というような言い方をご自身がされたり、家族の方が、邪魔物のようにおっしゃったりすることを、私は仕事として福祉に関わることがあるので、よく聞くことがあります。

でも、それって、人間が生まれて、生きていく過程の中で、自然なことだと思っています。当然、赤ちゃんは全面介助ですし、当然年老いれば手足が動かなくなる。認知症が始まるということもあるでしょうが、それは誰にでも起こることだと思えます。だから、こういう子どもたちの存在を通して、一生懸命生きることが最も大切なんだということを伝えていきたいなあと思っています。それはやはり、地域の方々をはじめ、社会の方々に共感いただけるような、我々の活動・言動でなければいけないのかなと思っています。

### **必ずあるうちの子の生まれた意味**

うちの子が生まれてきた意味っていうのは、必ずあるんだと思っています。たとえ言葉がなくても、寝たきりでも、排せつもオムツであっても、「一生懸命生きている」と、我々に感じさせてもらえるのが、生きている、存在している意味かなと思っています。

レジュメに書いています、「この子らを世の光に」ということですが、これは、糸賀一雄さん(滋賀県で、知的障がい児等の入所・教育・医療を行う近江学園を開設、園長となり、1968年死去 福祉と教育に信念を持ち携わった人)の残した言葉です。

「こういう、障がいの重い子どもたちを世の中の真ん中に据えて、守り続けるような社会は、非常に良い

社会であろうと思います。ですから、こういう子どもが世の中の光になれる。この子らに世の光を当ててくださいではなく、この子らを世の光にしようじゃないか」と言いながら亡くなられた先達がおられます。こういう思いをもって、私も一生懸命やっていきたいなと思っています。

障がい児家族同士が比べ合ってしまう時があったりして、あっちが良くてこっちが悪いみたいなどころがあるんですが、そういうことではなく、抽象的ですが、違うということを認め合いながら、より良く生きていくということが、子どもたちから教えられたことだと思っています。

今日は、中学、高校生の方々もみえていますが、そういう障害のある子が生まれることは、全く自然の成り行きなんだ、そういうこともあるんだと聞いていただければいいかなと思います。私の方からは以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(会場を見渡ししながら、空席を示すように手を差し伸べながら)会場の後ろに立たれている方、前の方が開いていますから、どうぞ前の方に。(パネリストの語りを、囁みしめながら、しみじみと)皆さん、知るごとの大切さ、交流することの大切さ、それをやっぱり思います。「うちの子には、生まれてきた意味がある。」いつ聞いても、Dさんの言葉が心に染みます。

私たちは、様々な現実を生きています。様々な立場の中で暮らしています。私の長女は、大阪の子どもの病院で「NICU(新生児集中治療室)」という病棟に居ります。400gや、500gで生まれて来た子どもたちとの日常を、帰ってきたら語ってくれます。力が湧きます。体が熱くなります。命のすごさ、人間のすごさ、生きるごとの意味を、私たちはしっかり心に刻みながら、人間を信頼する、人間を尊敬する。そして、人と人が豊かにつながっていく、そんな地域社会を創っていききたい。そのことを強く思います。

板野中学校では、同和問題をテーマに取り組みました。それぞれの学校でそれぞれのテーマがあろうかと思えます。でも、やっぱり、今ここにある問題、自分自身の問題、そのことを安心して語り合える。語り語りを生んでいく。その語りから自らを癒し、仲間を癒していく。そんな信頼と尊敬の絆を、つくっていききたいと思うんですね。

応神中学校で、語り合いの学習を実践してきたC先生のレポートを先日読ませていただきました。その文面に、やっぱり体が熱くなります。「私に何ができるか」。「私に何が問われているか」。そんな思いをもって話を聞いていただけたらと思います。(パネリストに向かってにっこりしながら)それでは、C先生、よろしくお願いします。拍手でいきましょうか。(拍手)

## 《パネリスト C》

(立ち上がりニコニコしながら)皆さん、こんにちは。(会場から、明るく「こんにちは」声が返る)国府中学校から参りました、Cと言います。この後、坐ってお話します。こういう場で、私は話慣れておりませんので、いただいた時間を、自分が本当に今立っている場所や、自分がやっていることを、ここにおられる方々と共有できたらと思っています。よろしくお願いします。

### 応神中学校に赴任前と赴任してから

(淡々とした語りの中にも、自分を見つめ続けながら)今、A先生の方から、応神中学校で勤務をしていた時のことを少しお話していただきましたが、現在は、国府中学校に来て2年目です。教員になって15年目なんですが、2校の中学校を経験した後に、8年前に応神中学校に赴任しました。

応神中学校に来るまでの、私の同和問題学習に対する考え方は非常に消極的で、実は、私は広島育ちなんです。徳島に来るまで、「同和問題」という言葉すら知りませんでした。徳島に来た時に、徳島市役所に

同和問題についてのスローガンが書いてあって、母親に「同和問題って何？」って聞いたのがスタートです。

その後、大学でも、4年間同和問題についても学んできたはずなんですが、教師になった時に、私たちは何を教えていくのか。どういうことを授業でしていけばいいのかということ、全くわかりませんでした。それが、応神中学校に来て、どのような経過で、私がここに立たせていただくようになったのかを、お話しできたらと思っています。

### 応神中学校でのスタート

8年前、応神中学校に赴任となった時、2年生の担任になりました。2年生は、その時に2クラスあったんですが、2年A組がY先生、B組が私でした。2年生の担任を持つと決まってしばらくした時に、「この学年で、生活ノートをしよと思うんだけど」と、Y先生から言われました。「生活ノート」というのは、毎日毎日、生徒と先生の間で交換日記のような形で、「今日あったこと」「今考えていること」「ふと気づいたこと」何でもいいんです。日記のように、ある時は、その時の気持ちなりその日にあったことを書くこともできれば、ずっと秘めてきた思いをふっと書いて来てくれることもあります。そういう、「生活ノートを始めようと思うんだけど」と問いかけられまして、何も考えないで「はい。じゃあそうしましょう」とお返事しました。そういう所からスタートしました。

### 生活ノートに書かれたある女の子の思い

2年B組の子どもたちと、その、生活ノートのやり取りをスタートし始めてから、半年くらいの時です。2学期の半ばくらいだったと思うんですけど、ある女の子が、部落差別に対する不安、自分の心の中にずっと秘めてきた不安というものを、生活ノートの中に頻繁に書いてくるようになりました。「もし、部落差別にあつたら怖い。自分が大人になって、結婚差別にあつたら怖い。」

それを読んだ時に、勉強してきて、部落差別や結婚差別の恐ろしさみたいなものを実感して、「怖い」と書いて来ているのかなと最初は思いました。けれども違いました。彼女の8歳くらい上のお姉さんが、その当時、結婚差別にあつていたんです。

彼女のお姉さんは、当時、1～2年くらい付き合っていた彼との間に赤ちゃんができました。彼のお家の方と、彼女やお姉さんのご両親で、「結婚をしよう」という話し合いを持たれます。そこで、彼女のお姉さんが、「お腹に赤ちゃんがいるんだけど」ということを、彼や彼のご両親に話した時に、私のクラスの、その彼女の言葉をそのままお伝えすると、お姉さんの彼の親は、「部落の者の血は汚い。部落の者の血はいらない。息子は長男だから、そういう人と結婚をするわけにはいかない。」ということ、はっきりとお姉さんやご両親の前で言われたそうです。

そのことを、私が担任していたその女の子は家に帰って、泣いているお姉さんから聞きます。お姉さんは、彼女の目の前で泣いて涙をポロポロこぼしながら、「お腹の子を墮すしかない」と、彼女に伝えます。その時、中学生の彼女は、自分のとてもとても大好きな、お母さんのように慕っていたお姉さんの口からそんな悲しい言葉を聞き、それからずっと部落差別に対する不安というものを持ち続けていました。

私が担任になったその時には、もう、すでに、彼女は心の中でずっとそのことを考えていたんだと思います。ただ、彼女自身は、それをどういうふうに伝えればいいのかわからないし、クラスの中でも、友だちの中でもそういう話をしたことはなかった。ただ、とても仲のいい友だちとはそういう話もしていたようでした。そのことを私に伝えてくれたのが、中学2年生の2学期の半ば、生活ノートを通してでした。

私がそのノートを初めて読んだ時、どう返していいかわかりませんでした。今まで、知識として、同和問題、結婚差別を勉強してきたことはあります。でも、実際に、自分の目の前に、結婚差別、同和問題を突き付けられた時に、自分が何をすればいいのかさっぱりわかりませんでした。ただ、彼女と、生活ノートのや

り取りを通して泣くしかできませんでした。

でも、これから未来に向かって色々な希望があって、いろんな可能性を秘めている14歳の女の子が、どうしてそんなことで涙をこぼさなければいけないのか。どうしてそんなことで不安に怯えて、これから恋愛していくだろうその相手との間に、不安を抱えながら恋愛をしていかなければならないのか。そう思った時に、非常に腹が立ちました。

### **私のやってきた授業への見つめ直し**

私が14歳の時には、そんな苦しみなんて味わったこともありません。それから、自分自身にも腹が立ちました。どうして私はそんな返事しかできないんだろう。どうして私は、これまできちんと授業をやってこなかったんだろう。そういう、自分に対する腹立ち、いらだちの中で、誰かを責めたり誰かのせいにするのではなく、まず、自分が変わらなくてはいけないのではないかと思いました。

自分がそれまでやってきた授業を見つめなおした時に、彼女が、堂々と胸を張って卒業していけるだけの授業ができていたのだろうか。そこから、今の授業ではいけない、今の自分ではいけない、自分が変わって、来年3月に彼女が顔をあげて、友だちと笑って卒業していけるように、そして、卒業していった後でも、彼女がずっと幸せで希望を持って生きていけるような、そういう授業をこれからの1年半でしていこうと思いました。

それからの、その子たちとの中学2年生を担当した時期と3年生を担当した時期は、自分自身の中でも、一番よく同和問題について勉強したと思います。ただ、私が勉強したことよりもはるかに、授業で子どもたちの語ってくれていることの方が勉強になり、内容がありました。

### **応神中学校でやった全体学習**

授業をしていく中で、今、A先生が「全体学習」ということをお話しされましたが、子どもたちが語って語って、自分たちの思いを仲間に伝え合っていく。先生に伝え合っていく中で、いろいろな意見の交換が生まれてきて、つながりが生まれてきて、さらにもっと勉強しようという気持ちが湧いてくる。そういう全体学習という授業の形態をとりました。

その子らが中学3年生の時に、私は初めて全体学習をやりました。その、全体学習の時に、先程お話しましたお姉さんが結婚差別にあったと話してくれた彼女は、先生や全校生徒の前でそのことを語ります。

全体学習で、その子が語っていける雰囲気がなかなか作れない中でのスタートでした。最初は発言もなかなか出なかった。でも、その中で、少しずつ、彼女のまわりの友だちが彼女を支えるために発言をしていきます。自分の親の世代で部落差別があったということを、次々と語っていってくれます。

ある子は、「お父さんとお母さんが結婚する時に、やはり、相手方の御両親に反対された。その反対を受けて、ムラの中のお母さんの側も反対する。お互いに反対する中で、子どもができて結婚して、そのできた子どもが自分だ。でも、今でも、おじいちゃんおばあちゃんとは、うまく仲良く話ができない。おじいちゃん、おばあちゃんがどうしても遠い存在に思える。」そんなことを語ってくれました。それから、ある子は、「親が離婚して、その原因の一つに部落差別があったということを、おばあちゃんから聞いた。お母さんから聞いた。」と語ってくれた女の子もいました。

全体学習の中で、子どもたちが、自分の家族のありのままの姿を語っていくことで、お姉さんが結婚差別にあった彼女も、その時のことを話してくれました。(上の一点をじっと見つめ、声を詰まらせながら)その時の話し合いを私は一生忘れません。彼女が涙をボロボロこぼしながら、気が付けば、私も周りのみんなも涙をボロボロこぼしながら、全体学習をしたんですけど、(しっかり前を見つめ)言葉にできません。

その時の彼女の涙であり、「何で、部落っていうだけで人が殺されなあかんの」、「何で、部落っていうだ



けで幸せになれるの」という問いかけに対して、一瞬、確かに、言葉にできない重苦しい雰囲気もあったんだけど、その時初めて、同和問題・部落差別っていうのはこういうものだったんだということに、その場に居合わせた、たくさんの人が気付かされた時間だったと思います。もちろん、私もです。

(しばらく下を向き、思いを整理しながら)その彼女が話をし終えて、「それでも、自分の家族は、お姉さんは、前を向いて今生きていこうとしている」と語ってくれました。私は、家庭訪問で、お姉さんやお父さん、お母さんにも何度か話をさせてもらいました。

この話には、後日談があるんですが、お姉さんは、今、その時の彼と結婚をして幸せになっています。つい先日、話をしてくれた彼女の成人式があったんですが、お姉さんも、成人式に小さな二人のお子さんを連れて来ていて、幸せそうな顔を見ることができました。

### **全体学習の終わった後の子どもたちの晴れ晴れとした顔**

#### **～生徒を頑張らせてしまったことへの後悔と子どもたちの姿からもらった元気～**

7年前、8年前の中学2年生の時の、話をしてくれた彼女の胸の内を思うと、彼女に頑張らせてしまった。彼女に授業でたくさんの人の前で話をさせなければ、部落差別について本気で語ろうとか、本気で勉強しようという気持ちを持たせられなかった。そういう後悔というものが、私の中にずっとあります。

(力強く)ただ、それをきっかけとして、クラスの子どもたち、学年の子どもたちがどんどん話し合っていきます。自分の家族、自分の友だちについてのこと、自分自身のことについて、どんどん全体学習の中で語ってくれます。いじめの話であったり、今の自分の人間関係であったり、とても重苦しい話があります。突き詰めていくと、ともしんどいことがたくさんあります。でも、なぜか、全体学習が終わると子どもたちは晴れ晴れした顔をします。重苦しい話をしているはずなんだけれども、本当に顔が晴れやかです。

それは、人の前で自分の話をしたことで、みんなに自分のことを分かってもらえた。聞いてくれる仲間がいた。そのことで、元気づけられるような思いだったのではないかと思います。それを見て、私自身が一番元気にさせてもらいました。

しんどい話を子どもたちとしていく中で、私自身も自分のことを語らざるを得ません。自分の、その当時に付き合っていた彼との話であるとか、自分の家族の話も子どもたちの前でしました。自分が教師になって8年目になるまでは、同和問題学習、部落差別のことをまったく知らなかったということも、子どもたちの前で話しました。一緒に勉強をさせてもらった。一緒に育ててもらった。そういう時間だったと思います。

そういうきっかけがあって、そういう出会いがあって、私自身が変わろうと思ってから、応神中学校で毎年全体学習をしてきました。たくさんの出会いがあって、ここではその全てをお話することはできないんですが、今、この会場に来ている応神中学校の教え子もいます。

それから、今朝、「先生、今日話をするんだろう。がんばってよ。私は今大学で、遠い所にいるから行けないけど」と、メールを送ってくれる子どもたちがたくさんいます。何より、そういう全体学習を通して、私自身が教員としての課題に気づかされた日々です。

### **国府中学校に来て帰ってきた子どもたちの反応**

今、国府中学校に赴任して2年目ですが、国府中学校に赴任した去年の4月、3年生の担任をしました。4月の10日、教室で初めて自己紹介をしました。自己紹介をした時に、あっさりとした自己紹介をしたのであれば、何もなかったのかもしれませんが、けれど、その時に、私のことを少しだけ詳しく話をしました。その時に、子どもたちから返ってきた言葉が、「きしょい」「うざいから、応神に帰れ。おまえなんか担任をなってくれと頼んだ覚えはないわ。」というものでした。

私が、子どもたちに深入りすればしようとするほど、拒絶をする。そんな環境でした。そんな子どもたち

と、去年1年間、応神中学校と全く違う環境の中で、応神中学校で私が教えてもらったもの、応神中学校の6年間で子どもたちからもらったものを、全部、国府中学校の形に変えたうえで実践してみようと思いました。

道徳の授業だけではなく、日々の生活の中で、生活ノートもずっと続けました。それから、全体学習はなかなかできませんでしたが、道徳の時間、学活の時間、総合の時間ももらって、子どもたちの中でいろんな話し合いをしてきました。それから、「マイスカイ」という学級だよりを毎週1回出していたんですが、それも、応神から続いてきた習慣で、国府中学校でも続けました。

そういうことをしていく中で、ずいぶん、子どもたちとの距離が縮まってきたある日、子どもたちに聞きました。「どうして、4月の10日、初対面の私に対してあんなことを言ったの？」

すると、子どもたちが返してくれた言葉が、「だって、教師ってそんなもんやと思っとった。先生はうざいけん、あっちに行って。シッシって感じだった。」「あの先生、2週間で鬱(うつ)になるわってみんなで笑いよったんよな。」というものでした。

その時に、辛くなかったと言えようそになりますけれども、じゃあ、それが子どもたちの責任なのかといえば、私は、そうではないと思います。そういう人間関係しか紡いで来れなかった子どもたち、その人間関係を紡いできた先生たち、その人間関係を育ててきた、子どもたちの周りにいるすべての大人の責任なのではないかと思っています。

### **差別の実態に学べということ**

同和問題学習の中で、よく、「差別の実態に学べ」と言われてきました。差別の実態ということでみると、その子どもたちの育った、家族であり、地域であり、学校のすべてのことを考えた時に、子どもたちには責任はない。そういう人間関係しか紡いで来れなかったとすると、今からその紡ぎ直しをすればいいと思いました。

そういう形で、応神中学校で教えられてきたことを1年間やってきた結果というか、3月11日、ちょうど、東北の大震災があった日です。3年生の子どもたちは卒業していったんですけども、その1年間は、あまりにも短い1年間だったと思いますけれども、子どもたちは、本当に名残惜しそうに中学校を去っていきました。

### **国府中学校での可能性と応神中学校との継続したつながりの中で**

その1年間に私に何ができたのか。できなかった方が多いと、私自身思っています。けれども、「先生と一生つながっていこうと思う。」「先生とこれからいろいろ勉強していこうと思う。」そう、卒業の時に子どもたちが言ってくれました。私は、その子どもたちとは、1年間しか付き合いがなかったんですけど、その1年間でできなかった方が多かったとしても、それからのつながりがあれば、何とかなると思っています。

応神中学校を離れてからも、応神中学校の校区で、「中学生友の会」として、週に2回勉強会があります。そこにも行き続けています。「応神中学校を離れたら、応神中学校の生徒とは終わり」ではなくて、その後も、ずっと、応神町とつながっていけばいいのだと思っています。そういうつながりを教えてもらったのも、応神中学校、応神町という所で、6年間私が育ててもらい教えてもらったことの一つです。

なかなか、6年間で簡単にお話するという事は難しいんですけど、この後、また機会があれば、応神中学校、応神町、今、勤務している国府中学校で関わってきた子どもたちのことを、お話しできたらと思います。以上です。(拍手)

### **《コーディネーター A》**

(一言一言を大事にしながらゆっくりと)大きな温度差があります。学校によつての、取り組みの温度差は大きいです。やっぱりひとごとです。無関心です。必死に自分のことを伝えた時、さらっと、「へえ、そんなことあるん」そんな言葉が返って来ます。「ああ、もう口にしまい」と押さえてしまう。

本当の切なさ、本当の苦しさ、それをきっちり受け止め合える。そんな職場でありたいし、地域社会でありたいし、教室でありたいと思うんですね。この場においでる皆さんの中にも、本当にいろんな立場があつて、同和問題を自分の命に関わる問題として、深く関わっておられる方もおいでるだろうし、「へええ？まだそんなことがあるんか」という所で生活されている人もおるわけです。

この後、B君に話をしてもらおうんですけど、彼は、数年前にも、この場で話をしてもらいました。その時には、板野中学校の卒業生としてこの場に立ちました。今回は、彼の職場である、「E社」という会社名を出して、この場にいます。昨日も職場で、今日この場に立つという思いを込めて、上司の方に自分の立場や思いを熱く語っても、それがさらっと流されてしまう。肩透かしをくろうという切ない現実があります。「何で先生はそこまで必死にやるの？どうして？私にはわかりません。」さらっと言われました。

やっぱりこの温度差です。地区と地区外との交流が進みません。やっぱり、ひとごとという域を出ません。「いつまでこんな会をするんだ。こんな会をするけん、差別がなくならんのかな。」本気でそういうことを言われる方と、やっぱり出会います。説明するのに、エネルギーがいります。でも、やっぱり、きちんと人間関係をつんでいくことが問われていくんだと思います。

(しみじみと)私は、6年前に北島中学校に赴任しました。板野中学校で出会った子どもたちの力をいっぱい借りながら、北島中学校での人権教育が形つくられるんです。教室で、隣に地区の子がおつて、その生活やその思いを語ってくれる学校と、地区の子は絶対にいない。そこにいてもいないことになっている学校の取り組みは、全く違います。やっぱりひとごとです。自分自身をなかなかさらけ出すことにはなりません。

そんな中で、B君と、その仲間に思いを語ってもらうという人権学習を、北島中学校の子どもたちと作ったんですね。出会いがまた出会いを生んでいきます。「ひとごと」だったことが、深く学んでいくということに、学びの質を変えていきます。その出会いの中で、ある生徒がこう綴っています。

**「私は、部落差別についてよく知りません。だから、部落出身だとか、そういうのを考えずに生活していけば、それでいいと思っていました。私のものさしで行くと、どこ出身とか関係なくいろんな人と付き合えるので、この考え方でいいと思っていました。でも、これは、Bさんの言う「無知」であるということがわかりました。無知だからこそ、悪意がない。悪意がないからこそ、人の気持ちがわからない。こんなに怖いことはないと思いました。**

私は、無知とは怖いことだということに気付けたのは、先生、友だち、親、自分の周りの人のおかげだと思っています。そういうことを知り、身の回りの人権に気を付けるようになって、少しずつだけど、部落差別や、いろんな差別についてわかり始めました。

人権学習は、相手のことを知り、自分のことを知ってもらうことから始まっていきます。私たちは、これまで、心から信じ合える仲間づくりをめざし、人権学習を頑張ってきました。友だちと語り、クラスで語り、学年全体で語り合える勇気が、私たちの中に広がっていきました。卒業までに、次々と手が挙がる語り合いを私はしていきたい。

そして、苦しい部落差別の現実を生き生きと乗り越え、最高の笑顔で語ってくれた、Sさん、Bさん、Hさんのような、生涯の絆をみんなで作っていききたい。」

私は、板野中学校に赴任した5年目の年に、初めて1年生を担当しました。そのクラスに、B君がいました。彼は北島の子どもたちにも語ってくれましたが、経済的に恵まれなかったこと。友だちをなかなか家に呼べなかったその切なさ。本当のことがなかなか言えなかった思い。そんな思いも北島の子どもたちに語ってくれました。

家庭訪問に行き、通されたきれいに掃除された部屋。彼は小学校の時に走り幅跳びで全国3位になっています。その部屋には、その時の賞状と写真が飾ってありました。「ああ、この子は、この家族にとって生きがいそのものなんだ」と思いました。「この家族の夢なんだ」と思いました。深い深い愛情の中で、この子は育ってきたんだろうなと思いました。

ついこの前も、このフォーラムについての話をした時に、彼はさらっと言います。「先生、わいが差別されるんはどうってことないけど、親が差別されるのはたまらん」と。大学時代、私は京都という地で、いっぱい部落差別に合いました。その度に、父親の顔が浮かぶんです。母親の顔が浮かぶんです。祖父や祖母の顔が浮かぶんです。

家族が、生きる支えです。生きる力です。一番大切なものが踏みつけられる。それは、耐えがたいものがある。やっぱり、彼の話を通して家族を見つめます。家族の話をするとうすぐ涙が出るんですが、(隣のBさんを、笑顔で振り返りながら)まあ、泣かんと。

(会場全体に笑顔いっぱい)今日はちょっと浮いた格好をしていますけれど、非常に不自然な恰好をしていますけれど、彼の生き方だと思って、彼の思いに出会っていただけたらと思います。B君です。(拍手)

## 《パネリスト B》

### 生い立ち

Bです。今、先生も言うてくれたんですけど、いつも板野中学校の卒業生と紹介されていますけど、今日は、会社の名前で来ています。「昔の名前で出ています」みたいな乗りで行きたいと思います。座って失礼します。

時間も長くなってだるかったり、眠たくなったりすると思うんですけど、この時間を自分の中で大事にしたいんで聞いてほしいと思います。まず、自分の生い立ちから入らせてもらうんですけど、小学校の時から振り返るんですけど、「学習会」っていうのがありました。当時、塾的な感覚しか思ってなかったんですけど、学校が終わって学習会に行き勉強するっていう生活を送っていました。

その時に、「ただで勉強させてくれる所」っていうくらい感覚だったんですけど、自分の立場がどうとかっていうのは、全然理解していなかったし、しようともしていませんでした。ただ、なんかいろんな映画を見させられたりとか、いろんなリクリエーションとかして、友だちともいっぱい遊んだなという思い出が残っています。

### 中学校に入学して

そういう感覚の中で中学校に入学して、中学1年生の時に、A先生とも出会って、男の先生が担任だったことにびっくりして、それまで女の先生しか担任してくれたことがなかったので、あまりにも強烈過ぎて、「行けるのかな」とか思っていました。自分が地区出身だと気付かせてくれたのもA先生で、聞いた時には、まだピンとこなかったですね。「『地区』って言われたけど、どうなんやろ」みたいな感じでした。

今日も中学の時の仲間が来てくれています。Sとか、Hとか、Mとか、Y先生も、当時出会って、他にも同級生も来てくれています。その時にSと同じクラスになって、僕は、道徳が超嫌い、体育がごっつい好きだった、道徳の時間に、「バスケットやりたいな」って普通に思いよったし、「きれいごと」しか言わんような自分だったんですけど、Sが発表して自分の思いをバンバン言っていました。僕も入学当時、Sには負けたくなくて、バンバン手も挙げて言いよったんですけど、「きれいごと」ばかりを言っていた自分がありました。

### いつも発表していたのに発表できなかった日

中学校の時に、ご存知の方も多と思うんですけど、全体学習というのをやりよって、全体学習でも発表とかさせてもらいよったんですけど、いつも発表しよったのに、発表できん日があって、これはごっつい鮮明に覚えているんですけど、Sのクラスが公開授業をしよったんですね、Sにつながりたかったんやけど、つなげなくて、自分はその発表ばかりしよることに気付けた瞬間だったんです。何で、こいつは本当の事を言いよるのに、自分はいい加減なことばかり、いい事ばかり並べて言いよるんだらうなっていう感覚があって、僕は発表できなくて、公開授業終わって、すぐにSの所に行行って、「つながれんでごめんな」と言っって泣いた記憶があります。これを鮮明に覚えています。

中学でも同和問題とか考えるようになって、それでも、差別の重みとかはまだピンと来ていなくて、その当時、Sの家に差別電話がかかって来て、この話を知っている人も何人かはあると思うんですが、「あなたの所は『エッタ』やろ」という電話で、他人事とは思えなくて、ましてや、Sは連れやし、ごっつい自分のことのように思えてきて、この話をし出したらこのままずうっと行ってしまうので、中学時代にこんなこともあったというくらいにしておきます。

### 高校での現実

今も差別があるという現実を知らされた瞬間でした。そういう感覚の中、つながれた仲間もよおけおったし、中学を卒業するのがなごりおいしいものもあったんですが、高校に行行って、高校ではいろんな所から来るんで、自分の存在を、隠してしまいがちな自分もおったと思うんですね。

高校の時に、同和問題の資料を扱って授業をするという空間があって、その時に、高校生で派手な子もおるんですけど、派手な子が、先生にこう言うんですよね。「もし、先生の子どもが地区の人と結婚したらどうするんよ。」すると、教育者である先生が、しばらく考えて「ウーン…わからん。」って言うんですよ。

それを聞いて、「おいおい！」っていう感じだったんですが、でも、僕はそれって正直ですごく好きだったんですよ。何に悩んでそう答えよるのかはわからなかったんですが、常に自分の思いをごまかさずに言える人だと思ったんです。間違いは気づいていけばいいと思うんです。ただ、内容が内容ただだけに、ショックはショックでした。そういう雰囲気の中で高校生活を送りました。高校生活というのは、さらっと流していける話なんです。

自分の中では、だんだん敏感になって来て、「部落出身である自分」というのがだんだん身近になって来て、今もそうですけど、「Bは地区の人間である」ということをパワーにしている自分がありました。今もそうですけど。

### E社に入社して

社会人になって、E社に入社して、今、11年とちょっとになりました。今日も、企業の人も来ているみたいだし、製薬工場の人も何人か来ておられるみたいなので、聞いてほしい話なんですけど、入社して2～3年経って、3交代で夜勤とかあるんですけど、ある時仕事に行行って、工具箱にボールペンとかいろいろ使いまわすように入れて使っているんですね。僕と同級生が一人、一緒に入社していて、彼もこの機械を使っている、今までは真っ白だった道具を入れている箱に、「エッタはこれをさわるな」と書いてありました。

いわゆる差別落書きです。その時に、僕は衝撃をだいぶ受けて、一緒に入った子に「お前もこれを知ったんか」と聞くと、知っていたけど、どうしていいかわからなかったらしいんです。書いた人は誰かっていうのはわかっていたんで、今だったらいかなかったかもわからんけど、その時にはすごくパワーがあって、書いた人の所へ行行って、「こういう差別落書きとかで、地区の人を差別することで、地区の人が亡くなったりとかしよるけん、こういうことをするのはやめんかよ」みたいなことを言えたんですね。実際に部落の仲間でも、こういうことで自殺したりする人もおるわけです。

その書いた人とは普段からそう親しい仲間ではなかったので、やっぱり、いまだに、ぎくしゃくするような関係なんですよ。なんか、それが寂しかった時間でした。

結婚差別とかは、そういうのはあるのかなという気がしてはいたけど、企業で、昨日も上司に話した時に、「そんなの、まだあるか？」と言われたんですけど、やっぱり現場のことというのは、上の人は知らんと思うんですね。そこで誰が悩んでとか、まあ、そこまで踏み込む必要性もないしね。

### 自分って、どうみんなとつながっていったらいいのかな

でも、僕は、守っていかないかんところやし、自分のフィールドでもあるわけで大事にしたいし、カッコいい言葉で言うけど、仲間との絆っていうのを大事にしたくて、今、会社で自分の下に20人くらいの部下がつくっていう中で、部下の責任も自分が取るみたいな話になるんですけど、こういう現場の空気の中で、「自分って、どうみんなとつながって行ったらいいのかな」っていうことをすごく考えたんですよ。腹を割って話せるというのが、すごく大事だと思うんですけど、腹を割って話せる空間って全くなくて、でも、自分のことを言うことによって、相手も自分のことを言ってくれるというのが、今までも自分の生活スタイルだったし、スタンスだし、「みんなで頑張ってる盛り上げていこうや」みたいな声掛けをしています。

まあ、「自分のことを言う」と言っても、自分が部落出身ですなんていうことは、言えないし、言わなくてもいいけど、みんなで頑張ろうとする空間っていうのを、今、作ろうとしています。「差別落書きがあった」という空間がだんだん濁されてきて、11年勤めてきているんですけど、こういうことがあったら、なかなか、このことに触れれんというか、ちょっとビビってしまうというか…。

どうせなら、みんなにも考えてもらいたいことだし、「大塚」って言ったら、ここにも(壇上の机に並んだ、大塚グループの作っているペットボトルを示し)並んでいるんですけど、すごくいい製品作っているし、この前も、ドリカムとかも呼んですごいことをしているし、いろんなことをプレゼンテーション(以降、プレゼンと表現)しよるのに、こういう会もプレゼンするくらいに持っていきたいなと思ったりします。多分、難しいとは思うんですけど。

### 職場で感じる温度差

さっき先生も言ってくれたんですけど、僕らの上司って、すごい良い人なんですよ。「お前らのええように仕事せえ」って言うてくれて、やりたいようにやって、業績が上がったりもするんですけど、すごくオープンな人でいいんですけど、やっぱり、この話になったら、きっと無知だと思うんですよ。

「そういう会に行くけん差別がなくならんのとちがうか？そうは思わんか？」と言われて、なかなかその場で言えないし、合わせておかないといけませんから、笑って「ああ…」みたいに返したんですけど、まあ、わかりますよね。「まあ、気楽に行って来いよ」と言われて、気楽というわけにはいかないんですけど。温度差というのは感じます。

僕が明日出勤すると、多分、今日のことを言うと思うんですよ。いろいろな資料も渡したりして言おうとしているし。1回、僕のことを上司に言った方が、もっと、自分を見せれるかなという気がしています。それっていうのは、その人と、いろいろな所でつながらないかんと思うし。そんなところで心が途切れていたりするんですけど。「わざわざそんなことを言わんでもええのに」みたいなことも言われるし、でも、何で言ったのかということを知りたいなということもあります。今の社会の中で、企業にもそういうこともあるんだなということを感じたことでした。

今、自分自身のライフスタイルで行きよって、支えてくれる人もいます。僕はダンスをしているんですけど、同じダンスの先生なんですけど、そのダンスの先生の子供も、片耳が聞こえないという…(言葉に詰まり涙ぐみそうになり、照れくさそうに)僕、こういう場では泣かんと思っていたんですよ。おかんのことで泣

くけど…。

音楽とかしていて、いつもヘッドホンをしています。さっきまで会話していて、呼んでも何の反応もないなと思ったら、左耳にヘッドホンを付けていて、右耳は聞こえないから、反応がなかったんです。これを思った瞬間に、どういう表現がいいのわからないんですが、「右耳になってやりたいな」と思ったんですよ。

それで、僕は正直に、「自分は地区の人間で」という話をしたんですが、その子は、部落差別とか全然知らなくて、その流れの中で、家の人と仲もいいらしく、家の人とかにも僕の話をした時に、「部落の人とは結婚させんぞ」と言われたらしいんです。「ここにもあったんか」と思いました。僕はこれを聞いても動じませんが、やっぱり、自分の好きな人の周りの人、その人に関わってくる人とか、全てを大事にしたいんですね。差別者なのかもしれんけど、すごく温かい目でおりたいなと思うんです。でも、「部落の人とは結婚させんぞ」という人の感覚って、なかなか変わらんし、根強いものがあると思うんですよ。

僕は、「部落出身だから、他人よりもこう頑張る」という考えもあまり好きではなくて、自分自身を見せてわかってくれるというのがベストだと思うし、自分にも自信があるし。でも、自分の普通のままでは、なかなか理解してくれんのだろうなという現状もあるし、これからそういう闘いの仕方になるのかなと思っています。

最近周りでそういうのが多くて。僕らの年代で、部落出身とか、部落差別のことで悩んでいる子が、ほんまによおけおって、ここ半年くらい、そのことを本当にすごく思うようになって、こういう話を友だち周りですることも多くなって、逆に、話がしやすくなったということもあるんですけど、いつもふらーっとしとる子も、この話になったら本気になるります。

### 自分の誇りうるところを持てる強さ

この前、町に遊びに行っって、広島の人に関わることがすごく多かったんですね。広島某プロ野球球団の応援ソングを公式で歌いよる人がおるんですけど、その人と熱く話をする場があって、お酒もだいぶ入っていたんですけど、常に熱い話をするので、僕も、自分の立場のことを、「実は、自分のフィールドはここで、こういうふう生きよるんだけど、なかなか思うようにいかん時があってね」とか話していたら、その人が、今まで肩を組むくらい位置で飲んでいたんですけど、その人から「お前、これからは、二度と、『エタ』『非人』とかそんな言葉を使うな」と言われました。

「自分はこのポジションでやりよるから、僕は、これからもこういうのを背負ってやっていくと思うし、恥じとるわけじゃないし、わかってもらいたいけん、これからもどんどん言っていくし。」そう返した時に、「絶対言うな。広島には絶対部落差別はない。俺も部落出身だし、被爆第3世や。でも、俺は胸を張って頑張るよるし、胸を張って『広島には差別はない』って言える。」そう、自分自身のことも言ってくれたりしたんですけど、それをききながら「逃げてないですか？」とも思ったりするんですけど、本当に強いのかもわからないんですね。

自分のやりたいことを一生懸命やりよって、本当に、自分の一歩を踏み出させるのにも自信を感じさせるような堂々ぶりで、僕も周りにはそういう人が多くて、その人と話した時には、「ごまかしてないですか？」と聞きたかったんですけど、そういう雰囲気でもなかったんです。

その時にちょっと思ったのが、一生懸命何かをしていることがすごく大事だなということでした。僕だったら、ダンスをやりよるんですけど、これが仕事であったりとか、サッカーとか、何でもいいので、「自分はこれをやっています。」「これには自信があります」ということを持てている人間は強いなと思います。

だから、A先生って本当に強いなと思うんです。先生にこんなことを言ったらなんですけど、自信持っってこの仕事をやりよって、胸張っと思っと思うし、昨日も、久しぶりに家族全員が集まって話をしてという時間だったんですけど、お酒も入っって「みんな、自分自身の誇れるところある？」という話になりました。その

中の一つだけ。おかんが、一番に笑いながら言ったんですね。(思い出して、涙があふれ、必死で我慢しようとして言葉が詰まる。しばらく心を落ち着かせて、照れながら)おかんの話をすると涙が出るっていう話はしていたんで、かまわんでしょう? こういうふうには俺らのことを見て笑ってくれるおかんが、しんたい思いをせんように俺も生きていかなあかんと思うし…。(しばらく思いめぐらせるが、マイクをコーディネーターに返しなが)長くなったなあ。以上です。ありがとうございました。(拍手)

### 《コーディネーター A》

中学1年の時から、今のような語りをしてきた若者です。家庭訪問の時の、おばあちゃんとお母ちゃんが迎えてくれて、Bのことをいっぱい誉めるんですね。それで胸がいっぱいになるんですね。

この子は、このお母ちゃんのもので、このおばあちゃんのもので、こういうふうで育ってきたんだなあということを強く思います。(力を込めて)皆さん!切ないことっていっぱいあります。差別落書きを同期の子が書いているという切なさというのは、心がかきむしられます。

私は、20数年前に、今の家に住むようになりました。新しい団地に家を構えて、数日後です。裏の方にある公園のトイレに行った時に、トイレで差別落書きを見つけました。私は教師です。それを見たら、さっと教育委員会に連絡せないかん。そのことをきちっと整理をせなあかん。そういう立場でありながら、吐き気がしたんですね。もう、動けんようになったんです。それは、私に書かれたものじゃないですよ。でも、同和地区の人に対して書かれたその文面を見ただけで、「俺はここで暮らしていけるんだろうか」そんなことすら思うんですね。何か月も、その場所によろ行かんかったんです。

でも、越える瞬間ってあるんです。必死にこのことを伝えた時、それを受け止めてくれて、癒してくれて、必死に伝えた自分の言葉が、自分の生きる力になって、自分の言葉が自分を癒していくんです。「ひとごと」から「わがこと」へというのは、結局、心にいっぱい汗をかいていくことだと思うんです。心にいっぱい汗をかきながら、本当の話ができる空間。教室、職場、家族、地域社会をつくっていくことなんです。この空間を本当に皆さんと大事にしたいと思います。

1時間くらいの語り合いになろうかと思えます。いろんな年代の方が、いろんな立場の方が、自分をめくる。自分を語る。それを必死で聴く。本当にまぶしいです!美しいです。一生懸命聴くまなざしに、力をもたってしゃべるんです。語らせていただくんですよ。人と人とのつながりというのは、温いです。力が湧くんです。そんなこれからの時間にしたいと思えます。

### 前半終了

### =意見交換=

### 《コーディネーター A》

必死に語る言葉、一生懸命に伝える言葉、自分の中からはぼり出す言葉、そこにやっぱり癒されていきます。いろんな立場の方が集まっておいでますので、いろんな価値観を共有できたらと思えます。それでは、マイクを回していきたいと思えます。(前の大学生に、温かい笑顔で発言を促す)いきましょうか?はい、マイクをお願いします。

### 《フロア 大学生》

(ニコニコしながら立ち上がり、語りかけるがマイクの音がピーピー響き、なかなか発言を始められない。別のマイクと交換してもらい、音声を確認して語り始める)

今日、この会に参加させてもらって、パネリストの方のお話を聞いて、いろいろ思うことはあるんですけど、私は今、大学1年生なんですけど、中学校の時に、(コーディネーターを振り返りながら)A先生に教え



ていただいて、「語り合いの学習」とか、人権の学習でいろんなことを学んで、中学を卒業して、高校でも人権学習をしてきたんですけど、語り合いをする場所とか、いい機会というのはあまりなくて、自分も参加できなくて、見失っていたなというのを、今日、この会に参加して思いました。

やっぱり、人が人を動かしていくっていうのは、その人の言葉であったり、まなざしとか、聞いてくださる人があって、一人一人の意識とかが変わっていくんだなと感じました。今日、また、語ることにエネルギーがいるということを実感したので、パワーを持って、これからも忘れずに生活していきたいと思いました。ありがとうございました。(拍手)

### 《コーディネーター A》

(ゆっくりと思いを込めて)私は出会ってきた子どもたちに、「みんなは私の夢なんだ。みんなの姿は、私の夢なんだ。共に部落を解放していく、差別を解消していく。みんなは私の夢なんだ。」と、ずっと語って来ました。中学生の言葉に、一生懸命の言葉に、本当に癒されるし、人間の可能性を私は見てきました。そして、教育は「まなざし」です。

今日も、必死に聞いてくれるまなざしに、いっぱい力をもらいます。安心があって、よろこびがあって、自分の精一杯が出せる。そんな出会いの場、つながりの場を大事にしたいと思います。じゃあ、つながってください。いきましょうか。(前列中央からまっすぐに手が挙がる)じゃあ、いきましょうか。

### 《フロア S》

私は、鳥取県から来させていただきました。Sと言います。この鳴門の地域人権フォーラムに来るようになって、今年で7年目になります。今、「語れる場」とか、「安心」という言葉がよく出ています。そのことに関して、私は、本当に小さな地域なんですけど、地元で推進員の自主学習会をした時に、本当に、少しでもそういう空気を持ってたなということがありましたので、一つだけ紹介させてください。

今年、うちの地域では部落問題を扱っています。「竹田の子守唄」を題材に、いろんな資料を持ちながら話をした時に、中途半端でも、子守唄を聞き比べてもらう中で、「違うなあ」という声が出ました。でも、いろいろな所でよく言葉として出てきますが、「もう差別はないだろう。こういう話し合いをするからいつまでも差別が残るでないか。そっとしておけばなくなるだろう。」その自主学習会の時にも、突込みでもなく、その場を混ぜてやろうでもなく、本当にそう思っているのかなという男性の発言がありました。

その時に、この鳴門の地域人権フォーラムに来た時に、若い方が今の現実をいっぱい話してくださいます。そのことも紹介しながら、今、こういう現実はいっぱい残っているんだということや、子どもたちの学習の場などを紹介させていただきました。

そうしたら、一緒に学習をしていた推進員さんの中から、「私は保護者として学校に行くけれど、子どもたちは今、「社会的立場の自覚を深める学習」というのをしている。前には、その、子どもたちの学習の前後には、部落の親も部落外の親もみんな出て、一緒に学習をした。」その意見に対し、最初に発言された人は、今でもそういう学習があるのか知らなかったと返されました。それに対して、再度推進員さんから返された言葉に、私は、「ああ、この学習を続けて来てよかったなあ」と思ったのは、「あんたの所はなあ、お母さんばかり学校に出ておんなるでないか。その話の内容はともかくとして、今日、学校でこんな学習があったっていうことくらいは、家で話さないけん。学校での保護者の集まりで、『親がもっと学習せないけんなあ』っていうことがよく話に出ますよ。」そういうふうに話してくださったことです。

同じ学習仲間からの言葉は、主催する側が、汗をかいて説明し、話をするよりも説得力があると思います。他の推進員さんからも、「子どもたちは今こういうふうに学んでいる」という声も出してくださり、参加したみなさんに少しでも、今の現実を知ってもらえたのではないかと思います。

私たちは推進をしていく時に、なかなか広がらない。なかなか伝わらない。変わらないということを言葉にしますけれども、続けてくることで、こうして声を出してくださる方も出てくるんだと、今年大きな力をいただきました。

その学習の最後に、「今日、問題提起をしていただいて、みんなの中で30分間ではあったけれど真剣に議論がし合えた。そのことが本当にありがたいと思います。こういうふう安心して思いを言葉にできる空気を大事にしていきたいと思います。」ということで学習を閉めました。帰ってから、また学習会を持ちますけれど、こういう空気の浸透した学習会を作っていけたらと思っています。

本当に、続けること、みんなの発言の一つ一つを大事にしていくことで、変わってくださる人が出てくるんだと思います。以上です。(拍手)

### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。本当に限られた時間ですので、3人の話を受けて、自分自身のことを出していただけだと思います。じゃあ、はい、いきましょう。(手を伸ばし指示しながら)マイクをお願いします。

### 《フロア S》

川内町で、学生生活を終えて、かれこれ10年位になるんですけど、鳴門金時を栽培して一生懸命農業をしています。Sです。今日、ここに勉強させてもらおうと思ってきたんですけど、僕は、昔から物事を卑屈に考えやすい性格のところがあって、もし、この会に参加させてもらって、「傷のなめ合い」みたいな感じで終わってしまうのは辛いよとか、そんなことも考えながら、今日、ここまで車を運転してきました。

僕は、今日も朝4時くらいから頭に電気をつけて芋掘りをして、この会に来たいので、早く仕事をしてしまおうと頑張りました。毎日イモとばかり会話をしているので、こんなに大勢の人の前で話をするのは久しぶりで、こうして話を聞けたり、話ができることがごっついい刺激になっています。

僕は、部落差別を受ける立場だと自覚して、今まで生活してきたんですけど、僕も、「差別には負けへんぞ」って思っているんだけど、しんどい思いをしてきたことがあるのは事実です。そういうことに会おうと、家族とか、さっき話をしてくれたBの顔が浮かんでくるけん、「こんな人には負けへんぞ」と、逃げんと歩んできたつもりです。

今、僕が農業をしよって思うことは、「部落差別はないわ。」「世の中にある、渦を舞い取るような悲しい偏見とかはもうないわ。」と言いたいです。でも、僕、勉強とか苦手なんですけど、(上を向き考える仕草をしながら)こうやって考えてみると、まだまだ悲しい問題は、社会の中で生活していくうえであります。

それで、僕、ずっと思うんですが、差別があることでしんどい思いをしているのは、自分自身、差別を受ける立場であることだと思っていたんですけど、差別のあることで、社会の、周りのみんなが制限を受けたり、しんどい思いをしよるんでないかなと思っています。

(言葉に詰まって、書いたメモをめくりながら)いろいろ言いたいことがあったので、イモとばかり会話しよるんで、言いたいことをちょっとでも伝えたらええなあと思って書いたんですけど、先日、お盆で、僕もゆっくり故郷へ帰る機会があったんです。父親の兄弟4人なんですけど、父親方の実家で、みんなでゆっくりお酒を飲める機会があって、「オッチャン、久しぶりやなあ」と言いながら、お酒をいっぱい飲みよったんですけど、従弟が、「ごっつい好きな人ができたからみんなに紹介するわ。見てえな」と言って、彼女を連れて来ていました。

「わあ!ごっついかわいいなあ!」と言いながら、お酒が進んで飲みよたんですけど、彼女が席を外している時に、従弟が「好きで好きでおれんけん、結婚しようと思ってるんじゃけど、彼女の両親が、地区出身の子と結婚するのはちょっと反対してしまう。」みたいな悲しいことを、僕や親父のお場で言うんです。「そ

うなんか。部落差別ってやっぱりあるんやな。昔の人が決めたことで、こんなんで悩むんはおかしいわ。」とか言いながら、お酒を飲んでいたんですが、僕は、従弟に、「大事なのはハートじゃわ。こんなんに負けたらあかん。僕らにできることは、彼女の周り、彼女の両親、彼女自身を本当に大事にしてあげることしかないわ。」という話をしたりして、なんか、親父も、「頑張れ！頑張れ！」とか言いながら、みんなが涙流していたのが切なかったです。でも、好きな人がおると言って紹介してくれたのはうれしかったです。

自分も、結婚して7～8年位が経つと思うんですけど、僕が結婚する時に、僕は地区出身で差別を受ける立場なんやけど、妻も、僕と結婚して差別を受ける立場になってしまうんかとか、僕、今、ごっつい可愛い娘がおるんですけど、僕とおることで同じ思いをするんかとか思って、そんなことは絶対に避けたいわって思うんです。実際、部落差別ってそういうことなんでしょう。

僕は、A先生とか、Bとか、たまたま出会えて、こうして呼んでもらえて、勉強できる空間っていうのがあって、助かっているというか、生き生きと生きられる部分があるんですけど、要は、僕、一生懸命農業をしようんですけど、卑屈な歩み方をしたって、気持ちいい歩み方をしたって、それが全部自分に振り返ってくるような気がするんです。それだったら、ちょっとでも、温かい生き方というか、みんなに胸を張れることは何にもないんですけど、ちょっとでもかっこいい、周りのドロドロしたものに囚われんような生き方を、せめてしていきたい。

学生時代は、差別がなくなったらええとか、ごっつい思いよったんです。今は、とにかく自分の周りは温かいもんでいてほしい、ちょっとでも向上し合っていける関係というものを作っていきたいなと思います。僕も、美味しいイモを作れるように、自分の心を磨こうと思っています。(ニコニコしながら)まだまだ言いたいことはいっぱいあるんですけど、時間が押しているんで、へたくそな話を聞いていただいてありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(ニコリと) S君の作る鳴門金時をぜひまた食べてあげてください。(切々と) S君の奥さんの実家は、イチゴ農家です。農業大学校で出会った2人、イチゴ娘の奥さん・Eちゃんと、鳴門金時を作る青年が結婚、その披露宴は本当に感動的でした。

S君は、大学時代、彼女の家に行った時、彼女の両親は、農業を学ぶ青年・S君を本当に大事にしてくれたそうです。大事にされるがゆえに、「自分が地区出身であるということを告げたら、このいい関係が崩れへんか」という思いで、とうとう地区出身ということをようS君は結婚前も結婚後も、よう言わなかったそうです。

「峠を越えて」という啓発ビデオにB君、S君が出演した関係で、奥さんのEちゃんも含めて、様々な研修会と一緒に付き合ってくれるんですけど、その中のある研修会で奥さんのEちゃんがマイクを握ってこう語ってくれました。

「私は両親に結婚前、Sさんの話をしました。『実は、Sさんはすごく気にしていることがある。彼は、自分が同和地区出身であるということをすごく気にしている。』すると、両親は、『まだそういうことにこだわる人っておるかもわからん。でも、それは間違うとるんだから、何も恐れることはない。もし、親戚の者で、2人の結婚のことで何か言うてくる者がおったら、お父さんとお母さんがしっかり話をする。これからはSさんとの生活が長いんだから、Sさんの幸せな家庭を作ってほしい。』という話をしてくれました。」

私は、このEちゃんの語りを聞いた時、人間の幸せというのは、一人一人の心にあると思ったんです。そして、S君の生き生きとした姿が、まわりの人を生き生きとさせていくんだと思ったんです。(顔をほころばせながら)会場の皆さん、鳴門金時の語りにつないでいきましょうか。

## 《フロア H》

すみません、失礼します。B君とS君と同級生です。同級生ばかりが続いて申し訳ないんですが、Bが語って、Sが話をしたら、やっぱり自分も言わなあかんかなと思います。やっぱり、それが、15年前の板野中学校の全体学習の語りでした。

今日は休みを取って、ここから130キロ以上離れた四国山地から、頑張っけて降りてきました。Sではないんですが、日頃、シカや野ウサギや、イノシシばかりをよく見ているので、こんなに大人数の中でお話しするのは久しぶりなので、ちょっと緊張しています。

本題に入るんですが、昨日、この会があるということをBから電話がかかって来て、今日、ここに来る時に、Bがどんな話をするかなと、本当に楽しみにしていました。今日、Bの初めの語りを聞いて、すごく込み上げてくるものがありました。「やっぱり、Bはかっこええなあ。すごいなあ。」と、改めて思いました。

自分らは、A先生のつながりで、3人で話をしに行ったりする機会っていうのがあるんですけど、3人ともが全く違います。言っていることも、価値観も多分違うと思います。でも、「全員が熱いものを持つとるな。やっぱり、それぞれが、自分自身の生き方に自信を持ってとるな。それが、一番やな。」ということ、今、改めてBが語りを聞き、Sがイモの話をし、自分自身もやっぱり、また元気をもらいます。

このきっかけを作ってくれたのが、自分自身は同和問題学習だと思います。この会のテーマである「ひとごと」から「わがこと」へ。やっぱり、このような、みんなの前で発表するという取り組み。やっぱり、当時の全体学習は、自分たちも発表できるような感じではなかったです。でも、ちょっとずつ、BやS、他の子、それぞれが、自分の言葉で言いながら、やっぱりつながっていかなあかんという所から、すごく自分自身を見つめられるようになりました。

自分自身も、久々にこういう所に来させていただいて、いろんな人の話を聞いて思うのが、本当に自分にできることを、自分を信じて一生懸命頑張れよかな。本当に、自分にできることしかできん。けど、自分を信じて、一生懸命頑張ることが自分を好きになっていくし、誇れるという取り組みなんやなど、改めて15年前の熱かった当手を振り返ります。

やっぱり、そういうつながりをいただけた。これは、自分の中の一生の財産です。この前も、ちょうど自分らの学年の同窓会をしました。電話連絡だけでどれくらい集まるかなと思っていましたが、卒業して15年経った同級生が50人集まりました。(ニコニコしながら)やっぱりまた、あそこの親方(Aさん)が熱い話をします。「もうええよ」と、みんなが早く終わりたいと思っても、熱い話をします。「集中せえ！わしの目を見い。」と言います。(会場に笑いが起こる)やっぱりそういう所が、今、自分の中にも生きています。

こういう所に来させていただいて、こうして話をさせてもらう。Bがおって、Sがおって、また、自分も自分の思いを言わせてもらってというのが、自分の生き方に関わって来ているのがすごくうれしいです。自分が、こういう所に来させていただいて、一番言いたいのは、「ひとごと」から「わがこと」へ。やっぱり、自分のことを「好き」って言えるようになりたいなと思います。これからも、「自分の人生」っていうのを生きていきたいなと思います。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

ありがとうございました。はい、お願いします。

## 《フロア N》

(フロアに向いて)神奈川県藤沢から来ました。Nです。昨年も来させていただきました。今、お話を聞いていて、なぜ、(近くの仲間に確認しながら)3年くらい来ているのかと言えば、やっぱりA先生の魅力に卒業生が惹かれるのと同じように、来ているんだなと思いました。

今年来てよかったなと思ったのは、まとめたものは何度も読んでいますが、Bさんっていうのはこういう人だったんだと、こうしてお会いできてよかったです。Sさんは、鳴門金時を媒介にして妻ともよく話をしてはいるんですけど、今年は女房と一緒に来られなかったんですけど、いつかは一緒に来て、この人が美味しい鳴門金時を作っているSさんだよと出会ってみたいと思います。

(Bさんを振り返りながら) Bさんは、お話は聞いて知っていたんですけど、髪型が女房が気に入るかどうか、(会場に明るい笑いが溢れ、Bさんが、アフロヘアのような頭を照れながら掻く仕草がある)前にも映像などでは見ていたんですけど、印象がすごく違って…。(ニッコリして)でも、それがとっても良かったです。また、女房を連れて来ますので、会ってやってください。ありがとうございました。

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。はい、お願いします。

#### 《フロア M》

鳥取から来ました。Mと言います。教育委員会に居りましたが、退職しまして3年目です。今日、ここに来るのに、すごくエネルギーがありました。仕事の絡みで来させてもらう時には、家族も文句を言いませんけど、「いつまで何をしているんだ。お金を何に使っているんだ。」と言って責めてきます。

でも、私は、どうしてもSさんについて来たかったので、頑張ってきました。来てよかったなって思っています。それは、私は役場に入って、地域から差別を受けました。そうすると足がすくんでしまいます。それまでは、地域の人たちと仲良くやっているつもりでおりました。Bさんが過去に書かれたような、私にもそういう辛い傷があります。その傷はなかなか治らないです。そうすると、目を離そうとしてしまいます。頑張ろうと思うんですが、辛くなって、自分にウソをつけているなっていうのがわかって…。

そういう中で、今日は自分の会社もきちんとと言われて、立たれた姿にすごく勇気をもらいまして、やっぱり語って帰ろうと思って、手を挙げました。C先生の、生徒さんとの関係も紡ぎなおせるんだと言われた言葉も、大きな勇気をもらえました。もしかすると、もう少し頑張っていれば、また変わってくるかなと思いながら、今、います。本当にありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(会場を見回しながら、手の挙がっていないことを確認し、Bさんにマイクを渡す)

#### 《パネリスト B》

また、SとかHの話になるんですが、本当に自慢できる連れで、俺も自信あるし、どこに出しても恥ずかしいような連れだし、いつも、励まし合いながらというか、お互いの価値観を共有し合いながらという所で、自分も、彼女のお父さんに、「地区の人とは」っていうふうに反対された時に、その時には、彼女の家にはまだ行ってなかったんですけど、たまたま行く機会があって、Sに電話しました。

俺は、最初に、どうしてもSの作ったイモ(鳴門金時)が持って行きたかったんですよ。(にこっとして)Sの畑のイモの味はわからんけど、まあ、美味しい、美味しい。これだけ自信のあるやつが作ったイモを持って行きたかったし、こういう言い方はおかしいかもわからんけど、「地区の人間の作ったイモがどれだけ美味しいか」という思いで、持って行かさせてもらいました。

滅茶苦茶喜んでくれたんですよ。彼女には、Sのこともいっぱい話をしたし、Sの作ったイモを持って行きたかったということも話しました。家の人には、「友だちの作ったイモです」としか言ってないんですけど。でも、イモを持って行って、すごく喜んでくれたし、そのイモでつながれた所もあったし。

友だちに自信を持つ生き方って、こいつらがおるだけで心が安心するっていうか。Sにも電話するし、Hにも電話するし、ましてや、今日は自分にとって特別な日でもあったので、忙しい中でもこうして来てくれて、すごい感謝しとるし、2人との個人的なトークになってしまうんですけど、(SさんとHさんに向かって、いっぱい笑顔で)ありがとう！(会場に笑いと共に拍手)

#### 《コーディネーター A》

(Bさんの言葉に嬉しそうに)はい、どんどん行きましょう。はい、マイクをお願いします。

#### 《フロア Y》

Yです。応神中学校で私も8年間勤めました。以前3年間勤めていたことを合わせますと、11年になるんですが、前に座っておられるC先生と、6年間一緒に仕事をしました。(時々上に目をやりながら、言葉を探しながら)それで最終的にたどり着いたのは、「家族の絆・故郷への思い」だという気がしたんです。その土台となったのは、板野中学校での12年間だったのかもしれないです。

(ゆっくりと、一言一言を大事にしながら)「家族の絆・故郷への思い」。今、何人かの人の話の根底には、そこにつながっているのかなという気がするんです。逆に言えば、私は、私の家族を見つめ直す作業だったと思っています。

うちの親父はずっと県庁勤めで、退職間際は、県教育委員会の事務の方の仕事をしていました。学校現場にいる父親だったんですが、さっき、S君が従弟の話をしていただけでも、やっぱり結婚適齢期の子どもがいると、親戚が集まった時にそんな話が出てきがちで、それはうちも同じだったと思うんです。

(当時を振り返りながら)私が結婚適齢の年齢だった時に、言われたんですね。「地区の人で好きな人でもおるんか？それだけはやめてくれよ。」そういうことを、やっぱり言われたですね。父親から言われたですね。公務員ですね。学校現場ですね。当時、ずいぶんとケンカをした記憶があります。ケンカしたんでは話にならんということはあるんだけど、感情が先に出てしまってケンカになったりしたんですけど、いくらケンカしても、わが親には変わりはないですから、何とかこの親とつながりながら、共に歩む道を探せばいいんだと考えてやってきたと思うんです。

学校現場で、「家族の絆・故郷への思い」という所にたどり着きながらも、それは、とりもなおさず、自分の家族、わが身を振り返る作業だったなと思います。この前、たまたま親父の机に座る場面があって、…机に座りませんわな。机の前の椅子に座る場面があって、(会場から笑い)椅子に座って、すぐ前の所にファイルがあって、「同和教育」って書いてあったんですよ。ケンカをして、15年、20年近くなるんですけど、親父は親父なりに考えて、自分なりに、子どものことを理解しようとして勉強しよるのかなあと考えています。

そういう言い方をすると、親に対して失礼なんかなあとも思ったりするんですが、そういう父親の姿を見ると、うれしいんです。父親も、老い先そう長くはないと思うんです。どういう生き方をして、どういう死にざまをするのか、子どもとして見届けていきたいなあと思います。

そんなことをずっと考え続けることのできた応神中学校での8年間であり、C先生と6年間共に歩んできた道のりだったような気がします。東北大震災で、はからずも、「家族の絆・故郷への思い」この、同じようなフレーズがずっと出てきているように思います。以上です。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

あと5分くらいです。どうでしょうか。いろんな思いがあろうかと思っています。どうぞ。

## 《フロア O》

小豆島から来ました。高校を卒業して、すぐに看護学生になったんですけど、今日は仕事を休んで来ました。高校生の時に、「高校生友の会に行ってくるからね」と言ったら、「行って来い。」「行って来い。」って言うけど、(込み上げる思いをこらえながら、懸命に言葉をつなげる)今、「高校生友の会に行ってくるわ。」と言うと、「何でお前が行くんじゃ。」とか、今週の土曜、日曜にある全国の青年大会に行くって言っても、ずっと反対されて、「行くな」と言われます。

今日の人権地域フォーラムも、親には内緒で来ました。親は仕事に行つとると思っているけど、私は生まれた地区が好きだから、この活動は続けるし、一生、親ともうまいことやりながら、活動を続けていきたいと思いました。親ともわかり合いたいから、きちっと話をして、家族との絆も大事にしたいなあと思いました。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

しっかりつながっていききたいと思います。どうぞ。

## 《フロア S》

(立ち上がるのと同時に元気よく)はい、こんにちは。岡山から来ました。Sと申します。今、僕は大学を卒業して3年目で、定時制の工業高校の教員をしています。父親は岡山で解放運動なんかをしているんですけど、父親は部落出身で、母親は部落じゃない人です。

僕は、中学1年生の時に父親に呼ばれて、話があるとされて、人権博物館に連れて行かれるんですね。そこで初めて「お前は部落出身なんだよ。」と告げられました。「ああそうなのか。」と思いました。「部落出身」と言っても実感がわからないので、小学校、中学校、高校と、授業の中にも出てはきたんですが、実感がわかなくて、「何なんだそれ」と思ってきました。

今、お付き合いしている人がいるんですが、その女性と出会ってから真剣に考えるようになりました。すごく最近のことなんですけど、3月くらいに、彼女からちょっと話があるって言われて、「親が、あなたの地区は、部落でしょう？だから付き合うのはもうやめてと言う。」と言うんです。

「お、来たか。」と思って、「そんなの関係ないだろう」と思ったんですけど、一番傷ついているのは彼女の方だったんですね。今まで育てて来てくれた親が、自分の好きになった人のことを否定して、「もう駄目だよ」っていうふうに言う。

そこに書いてある、「ひとごと」から「わがこと」へという言葉を見て、これだと思いました。小学校、中学校、高校と、部落問題学習をしますけど、「ひとごと」なんですよ。「自分の関係ないし」って。特に地区外の子はそうだと思います。その時に彼女の言ったのは、「誰も悪くないのに、何でこんなにしんどいんだ」という言葉です。本当にそうだなと思って、「親に会わせてくれ」って彼女に言ったんです。それで、彼女は両親と話をしてくれたんですけど、「いや、会えない。」と言われて、いまだに僕は彼女の両親と会っていません。「どうすればいいんだ」と思っています。

僕が、彼女の家に入り込んでいって、解決するものだったらいいんですけど、そうじゃないでしょう。それで、今回、どうすればいいんだと思って、A先生にメールを送ったら、この人権地域フォーラムがあるからおいでと誘われて、今回初めて参加させてもらったんですけど、来て、まず思ったのが、すごく若い人が来ているということです。おじさん、おばさんばかりかと思っていたのに、若い人がたくさんいて、発言するとなったら、若い人がバンバン手を挙げるんですね。徳島は意識が高いと思いました。しかも、こういう先生方に育てられた生徒さんというのは、すごく幸せだと思いました。今回このフォーラムに参加している皆さんも、すごく幸せな人たちなんだと思いました。

僕は今、教員をしています。定時制の高校なので、いろんなことが、心の中でモヤモヤ渦を巻いています。60歳を過ぎた人もいます。中学校を卒業したばかりの子もいます。子持ちの10代の子もいます。たくさんの子たちがいる中で、A先生や、C先生がやっているような授業を真似したいと思うんですけど、まだまだ僕には力不足だなと思うんですが、「負けんぞ」という思いもあります。今日は、来させていただいてありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

マイクをお願いします。どうぞ。

#### 《フロア F》

今年もやって来ました。小豆島のFです。まず、小豆島もとてもいい所で、人も温かい所で、いい所もいっぱいあるんですけど、切ない現実もいっぱいあるし、そんな中で、どうやって同和教育していこうと迷って、A先生に相談して、10年近くなりますが、僕たちが実際に授業を作っていくながら、うまくいかないという所でA先生に来ていただいて、その時に、B君は用事があって来られなかったんですが、S君とH君に来ていただいて、その時の3人の語りが、子どもたちを動かせてくれて、僕たちの背中を押していただきました。

その時に、中学1年生で「私のことです」と手を挙げて言ったのが、さっき発言してくれた彼女です。彼女たちがいろいろ勉強して行って、学校を出てからも、本人一人一人は頑張っているんですけど、なかなかつながっていけない現実があって、それをどうしたらいいんだろうと僕らも思っています。

例えば、自分も学校が変わって、C先生が経験したのと同じようなことで、また、違う学校でスタートを切って、語りを始めて、子どもたちも自分のことを語れるように少しはなって来ました。その時の子どもたちも今日も来てくれています。聞いてくれているし、言おうと苦しんでくれていると思うので、今日も来れて良かったなと思います。

いつもいつも、元気がなくなったりとか、しんどかったりとか、いろいろな時があります。みなさん、A先生を「すごいな」「すごい」と言われるんですけど、本当にすごいんですけど、多分すごくしんどい思いもされているのだと思います。一番前を歩く人って、すごくしんどいんだろうな。

でも、それを、これまで作ってきた人間関係の中で癒されているっていう言葉を聞いた時に、なるほどなと思ったところもありますし、新しい人と出会えるということが楽しいことでもあります。今日もここへ来る時に、仲間が今日も一緒に来てくれたんですけど、こういう仲間が一人ずつ、一人ずつ増えて行くことがまたうれしいです。

いつも出会える人と出会えるのは、本当にうれしかったし、今日は、Dさんとお会いして、人が生きている意味を学び、自分の気持ちを見つめ直すところがありました。人が年を取ると、役立たずと言うことがあるけど、人が何のために生きているのかなと、人に普段偉そうに言いながら、自分のじっくり見つめる時間になりました。また、いろんな所でいろんな人と出会いたいなと思いました。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(手を伸ばして中央付近を示しながら)どうぞ。

#### 《フロア 中学生》

今、前におられるC先生の教え子で、かっここからは見えないと思うんですけど、中学3年生です。1年生



の時にC先生が担任をしてくれて、道徳の授業をしてくれて、親に「部落って何？」って聞く機会があったんですけど、そしたら、今は離婚しているんですけど、「お前のお父さんが部落出身だから、お前も世間から見れば部落の人だぞ」と言われた時には、ショックでもなかったし、C先生がちゃんと教えてくれたのもあったので、全然マイナスのイメージが自分の中になかったんです。

中学生集会というのが7月の最後にあって、中学生が語ってくれよったら、まだまだ差別っていうのはあるし、部落差別の辛い現状というのは、あるのになににされとるし…。C先生と出会えて、なかなか面と向かっては言えないんですけど、ありがとうございます。以上です。(拍手)

### 《コーディネーター A》

あっという間の3時間です。年に1回、この場にやって来る。「ものすごいエネルギーがいる。経済的な負担もあって…」いろんな声の中で、やっぱり「動いてなんぼ」だし、「つながってなんぼ」だし、そこから見えてくるものがあります。

北島中学校にお世話になって6年。6年前からずっと中学生をここに座らせてきました。今日も、1年生ですけど、7人の子どもたちが前に座っています。やっぱり夢なんですね。この子らに託すんですね。この子らが、2年生になる。3年生になる。高校生になる。やっぱり、夢を託すんですね。いっぱい舞台上に立って欲しいし、その舞台上に立ったことを誇りにして生きてほしいし、その命を、家族を、輝いたものにしてほしい。それがやっぱり、このフォーラムに込めてきた願いです。

発表することは素晴らしいことです。自分を伝えるということはすごいことです。でも、この場に居ることが、この場でその思いに触れるということが、この空気を吸えるということが、この雰囲気を噛みしめられるということが、それを自分の力にしていけるということが、やっぱり、よろこびになっていくんだと思います。

幸せは、一人一人の心が決めます。Dさんが、「人の命は比較するものではない。」その言葉が、その通りに響きます。「あいつよりまだまし」「まだ、あの人がおったな。まだええやないか」そうじゃない。今、精一杯生きとる自分によるこびを感じながら、幸せを感じながら、生き生きと暮らしていける。生き生きと関係性を作っていく。そんな人生を真っ直ぐ生きていきたいなと思います。

最後、3人にまとめをちょっとだけさせてもらいます。(ニコニコしながら)B君、どうぞ。

### 《パネリスト B》

今日、会社の、企業のどうこうという話だったんですけど、僕の今のビジョンの中では、改善していく余地はなんぼでもあると思うし、人と人とのつながりで会社って生産とかするんですけど、関係性の中で物を作っていくと思っているんですけど、僕の行きよる会社は全然悪い会社ではないし、人もみんなすごいいいし、みんな汗かきながらやりよるし、これからもここで一生懸命やっていかないかと思うし、やっていきます。今日、自分の会社の関係の人も来ておられるということなので、面倒でなかったら声かけてもらえたら嬉しいかなと思います。

もう一つ、Y先生が言いよったんですけど、「家族の絆・故郷への思い」という言葉。なんか、Y先生がこんなこと言うんかっていう感じですけど(会場から笑い)すごい良い言葉やなって思いました。なんか、思いつきそうで思いつかんし、本当にそうやなって思わされたし、これからも、これをポケットにしまい込んでやっていこうかなと思います。今日はありがとうございます。(拍手)

### 《パネリスト C》

私にとって、こういう場というのは、自分をリセットする場です。さっき話をしてくれたT君もそうです

し、普段なかなか会えない、大学生の時の同級生だった友だちが、陽子ちゃんにののために来たよと言って、名前を見つけて来てくれていました。今日ここへ来てくれるのは、ここで会うまで知りませんでした。

私、学校とかクラスの中で、つながらなあかん。みんなの前で、語っていかなあかんっていうふうに言うんですけど、今の中学校に変わった最初、応神中学校で、自分がどれだけ大事に育ててもらって、守ってもらってきたのかということ初めて知りました。

最初に、職員会で人権のこととか話をしようと思う時に、「またか」という素振りが、ちょっとでも見えたらい辛くなってしまったり、隣の先生がどう思っとるんだろうなということが怖くなったりすることがあります。自分が、家に帰ってから自己嫌悪に陥るんだけど、また学校へ行ったら、どういう切り口で行ったらいいんだろうかと悩みます。

やっぱり、一人でそういうことをしていくのはしんどいです。その時に、こういう場であったり、中学生友の会であったりとか、同僚の先生たちに、実はこういうことがしんどかったと話をすると、それだけで、「また次には頑張ろう」と思えます。

今日、ここで話してくださった方々の言葉を聞いていると、「明日から頑張ろう」という気持ちがどんどん湧いてきました。国府中学校で、9月に文化祭で「青空」という人権劇をやります。私の育った広島のことと、東北大震災の原発事故による放射能汚染のことで言われて、差別を受けている人がおいでということを受けて、シナリオを作りました。他校生は来たらあかんという約束があるみたいで、なかなか誘いにくいんですけど、地域の人のふりをしてきていただけたら来れますので、もしよければ、来てみてください。今日は、本当にありがとうございました。(拍手)

#### 《パネリスト D》

失礼します。「ひとごと」から「わがこと」へということで、私自身も、最初にお話ししたように、全く、「障がいのある子どものことは関係ない」と、子どもができるまで思っていました。いざ自分のこととなると、いろいろな思いがあったんですが、先ほど会場のみなさんのいろいろな声を聞きながら、まだまだ、同和問題に関しては知らないことが多くて、皆さんの思いを、まだまだ分かっていないんだなと感じましたので、皆さんとつながり合っていきたいなと思いました。

また、会場に来られている皆さんも、逆に、「障がいっていうのは関係ないことだ」と考えておられる方も、中にはいらっしゃったかもしれませんが、せっかくの今日の機会をきっかけに、目を向けていただければありがたいと思います。

この会場を上がって来る時にたまげたのが、パトカーに乗ってやってきた少年が、先ほどのT君でした。どうしたのかと聞いたら、道を聞いたらパトカーに送られたということでした。(会場爆笑)

何とも、パトカーをタクシー代わりに使うT君の勇気に負けないように、私も、これからも、勇気をもって一生懸命やっていきますので、よろしく願いいたします。さすがにC先生の教え子は強者(つわもの)だと思いました。(会場内に明るい笑いが起こる)今日はありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。やっぱり、T君、あんたはすごいわ。(会場笑い)

毎年、この語り合いの中で思うことなんですけど、精一杯の言葉が、やっぱり心に染みます。愛南町から今日来ていただいているわけなんですけど、毎年、愛南町の仲間がここで語っていただいています。愛南町も人権ふおーらむを開催し、同じような語り合いをされます。

何年か前に、愛南町の人権ふおーらむで高校生がマイクを握ってこう言いました。

「愛南町に大きな量販店ができた。そのことを皆さん知っておるでしょう。そこに身体障がい者の方のための駐車スペースがある。そこへ1台の車が止まりました。そこから降りてきたのは若い人でした。その時、僕は何も言なかったです。ここにいる、中学生・高校生の人、いつか車に乗ると思います。大人の方は、車に乗られる機会も多いと思います。様々な生き方をされている。その場所を本当に必要とされとる人がいるということ、どうしてその場所があるかということをよく考えてほしい。」

高校生がしみじみと語ったんですね。私は、様々な駐車場で、障がいのある方のためにつくられた駐車スペースを見るたびに、その言葉がよみがえるんですね。その言葉が、私を律してくれるんですね。言葉って、やっぱり力です。生き抜く力です。それは本気で聞かせてもらったからですよ。その学生が本気で語ったからですよ。

昨年でした。その青年が大学生になっていました。大阪で再会するんですね。顔を見た瞬間に、「ああ、そうだったなあ」と思いました。その再会をまたよろこびました。本気で話のできる学びを、大人になっても、どんな立場の中でも、創っていけるんだと思います。それがこのフォーラムになっています。

最後に、21年前に全体学習を始めた時の教え子が、つい先日、パートナーと共にわが家を訪ねてくれました。彼の話をして、このフォーラムを閉めたいと思います。

その教え子は、常に全体学習をリードしてきました。中学2年の彼と出会った時、彼はこう言いました。「同和地区の人のために私は頑張りたい。差別をなくしていきたい。」

誰かのためという言葉は、美しく聞こえるけど、やっぱり、「ひとごと」なんです。彼は同和地区の出身です。自分が同和地区の出身であることを知ったら、彼はどんな語りをするんだろうなと思いました。お母さんにそのことを問うたら、すごく心配をしておられました。中学3年の家庭訪問で、私とお母さんと彼との3人の会話の中で、自分が同和地区出身であるということを知るわけです。

自分が同和地区出身と知った時、自分の中の部落差別意識を思い知るんです。そこから彼の生き方が確かなものになっていきました。道徳の全国大会で公開授業をした時、大会主題を指さして、彼はこう発言しました。「『人間としての生き方と考える道徳教育』と書いてある。でも、僕たちは、同和問題の学習を通して人間としての生き方を追求してきた。道徳の時間を通して、深く人間の生き方を見つめていくということは、部落問題を見事に解決していく力になる。この教育の可能性はそこにあるんだ。」と…。

彼の言葉が、会場に染み込んでいきました。この授業が、翌年、私を文部省(現在の文部科学省)に通わせ、文部省から、初めて部落問題に関わる道徳の資料を発信するきっかけになるわけです。『峠』という、結婚差別を扱った資料は、私自身の結婚の時のことを綴った資料です。そして、私自身の生い立ちと家族への思いを綴った『スタチの苗木』。この資料を発信するきっかけとなった授業をリードしてくれた青年です。

彼は今、35歳になります。でも、2年前に彼はこんな弱音を吐きました。「彼女の家族が僕を嫌っている。どうも、部落に対する偏見がある。こだわりがある。彼女の中にも心の揺れがある。会って、先生、話をしとてやってくれ。」そう言って彼女を連れてきました。

彼女は、私にさらっとこう言いました。「先生、私ね、小学校3年の時に父親が亡くなりました。その父親の遺言が、『娘を、絶対に部落の人間と結婚させないでくれ』というものでした。親代わりとして育ててくれたおじいちゃんの中にも、部落差別意識がある。」そう、さらっと言う彼女に、私は、「あなたは、彼とどういう生き方をしたいのか。結婚というのは、互いの信頼と尊敬の中でしかできんのか。はっきり言うたるわ。好き好きで結婚したって、いつか嫌いになることもあるわ。大好きを超えた世界があるし、そういう絆を作っていくんや。それは互いへの信頼と尊敬なんや。とことん2人で話し合え。俺は、2人に結婚せえとか、そんなことは言わん。2人でしっかり話し合って、2人で2人の生き方を決めたらええ。」と言いました。

そして、この本(板野中学校授業実践記録『峠を越えて』10年の総括をした本)には、道徳の全国大会の時の授業記録が入っています。彼が初めて部落出身であることを語った時の授業の記録が入っています。そこに彼の思いが溢れています。その、彼の語った所に全部付箋を入れて、「じっくり読んで彼と2人で話をしたらいい。」そう言って、彼女に渡しました。

最後のページに、道徳の全国大会をした年、郡の公開授業、県の公開授業と続けて行われました。その時に、たくさんの方が参観に来られました。その人たちが、彼の発言に感動し、注目したんですね。そのことを文章にしています。この文章を紹介してこのフォーラムを閉めたいと思います。こういう文章です。

**「同和問題学習でつかんだもの。それは、3年B組という堅い団結の絆だと思う。」**

一人ひとりの悲しみが、怒りとなって語り合い、支え合っていく。公開授業が終わった時、男の先生が僕のところにやって来て、がんばったなあと言ってくれた。僕は、ものすごくうれしかった。発表して本当に良かったと思った。この先生だけでなく、ほとんどの先生たちが、この学習の大切さを分かってくれたと思う。

この3年B組で、この3年生で、そして、この板野中学校で燃やしたこの炎を、多くの先生たちがまた誰かにつないでくれたらと思う。自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。そして、朝が爽やかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。

今日帰る時、コスモスの花が太陽に照らされて、僕に勇気をくれている様な気がした。過去を背負うのではなく、未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。これからも、悲しさではなくうれしさで、そして、嘆くよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられて、これからも、自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日、帰る時、女の先生から声をかけられた。『授業、感動しました。』と言ってくれた。僕は、『学校に帰ってからも、同和教育頑張ってください。』と言った。後で、もっといろいろな話をした良かったと思った。でも、多くの人々の心が動いてくれたことがうれしい。こうしてくれる人たちは、学校に帰っても頑張ってくれると思う。僕も、他人任せにならないように、頑張っていくつもりです。

**果てしない、そして長い道のりを、これからも光をたっぷり浴び、空気を思いっきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。」**

1年ちょっとかかって、結婚すると連絡がありました。とっても素敵な披露宴でした。そして、子どもを抱いて来た時に、「命」は「命」を生む。本当にその子どもの姿が、いっぱいよろこびをくれました。何度も子どもを抱かせてもらいました。連れ合いがずっと子どもを抱いていました。下の娘が、ニコニコしてその子どもを抱きます。

幸せは心の内にあります。なかなか響かん現実もあります。(力強く)だからこそ、歩き続けていくんです。私たちは、マイナスを見事にプラスに変える力があります。雨の日には雨の日の生き方があるように、私たちにできる生き方があるわけです。パートナーと語り、家族と語り、仲間と語り、私に何ができるかと問う、そんな日常を共に作っていかれたらと思います。この3時間を通して、感じたことをまた、仲間と語ってくれたらうれしいなと思います。

パネラーの3人の思いにつなげて、会場からいっぱい言葉が出ました。皆さんの一人一人のまなざしが、また、一人一人を勇気づけていきました。心から感謝したいと思います。これでフォーラムを閉めたいと思います。ありがとうございました。

**終了**